

お茶大「陸前高田実習」で何を学んだか？

わたしたちに何ができるか？

What did we learn in fieldwork practice of Ochanomizu University in Rikuzentakata?

What we should do for the places and the people in Rikuzentakata?

熊谷 圭知

お茶の水女子大学

概要：本報告では、2011年9月から継続して実施してきたお茶の水女子大学の地域研究実習（通称「陸前高田実習」）の成果と課題について紹介する。わたしたちがこの実習を通じて陸前高田から何を学んだかを紹介するとともに、私たちが何を還せるのかについても考えたい。

abstract： In this paper, I discuss on the process and the result in the fieldwork practice of Ochanomizu University at Rikuzentakata since September 2011. I highlight what we (students and supervisors) learned there and what we should return to the places and the people in Rikuzentakata.

1. 実習構想の経緯

被災地をボランティア等で訪れる大学生は多い。しかし被災地に関心を寄せ、関わりたいと思いながらその機会を得られない学生はさらに多い。東日本大震災についてマスメディアを通じた報道が減退し、震災が過去の出来事となりつつある中で、大学生たちに大学教育を通じて被災地への関心を喚起し、持続的なかかわりを促すことは大学の重要な社会的使命の一環でもありと考える。本報告の目的は、被災地でのフィールドワークに基づく実習がもつ可能性と課題を検討することにある。具体的な事例は、報告者が企画者・引率者として関わってきたお茶の水女子大学文教育学部グローバル文化学環の専門科目「地域研究実習Ⅲ」（2011年度）「Ⅱ」（2012年度～2016年度）である。

実習実現までの経緯は以下のとおりである。2011年4月20-21日、熊谷は同僚教員・学生とともに初めて東日本大震災の被災地（気仙沼市、陸前高田市、大船渡市）を訪ねた。被災現場の生々しさとともに、隣接する3市の間にも被災の様相や程度に差異があり、あらためて現地を訪ねることの重要性を痛感した。大学で開催した報告会には多くの学生が集まり、被災地のために自分たちも何か関わりたいという学生の熱意を感じた。同年6月、熊谷が父の故郷という縁をもつ陸前高田を再訪し、同僚教員とともに米崎小学校の仮設住宅を訪ねた。自治会長の佐藤一男さんとの出会いの中で、住民の集まる場所がなく、NGOの支援で現在集会所の建設を計画していることを知った。同僚教員の発案に佐藤氏が賛同し、集会所にコーヒー機材を寄贈しコミュニティカフェをつくることになった。学生とともに継続的にこの場所を訪れるために、お茶の水女子大学文教育学部グローバル文化学環の実習科目を活用することを企画した。グローバル文化学環は、2005年にお茶大の文教育学部に創設されたコースであり、1) 地域研究、2) 多文化間コミュニケーション、3) 国際関係・国際協力の3つの領域を結び合わせ、グローバル化時代の市民の育成をめざしている。カリキュラムの中では、机の上だけでなく、国内や海外の現場を訪れて、身体と五感で学ぶ「実習」を重要な柱として位置づけている。

2. 実習の概要

最初の課題は現地での宿と交通手段の確保だった。宿舎については最初の2回は個人宅の離れを借り、その後は高田ドライビングスクールにお世話になった。市内の移動は、地元の方の運転するワゴン車（8人乗り）で行なった。2011年度は、1回の現地訪問人員を学生5名に限り、3回の訪問計15名の定員で学生を募集・選考した。現地実習（往復の夜行バスを含め4泊3日）のほか、事前学習、事後学習を数回ずつ行ない、ワークショップの形で最終報告会も実施した。現地での主なプログラムは、被災した市街地の見学、市役所・NPO等での聞き取り、仮設住宅でのお茶飲み会や交流イベントなどである。当初気を配ったのは、苛酷な体験をした住民の方々とのような会話をするかということだった。学生たちには、こちらから話を聞き出さず「問わず語り」に耳を傾けるよう伝えた。訪問を繰り返すうち、住民の間にお茶大の学生がまた来たという信頼関係が生まれ2年度目の実習では、佐藤一男さんからぜひお茶大の学生に仮設住宅住民の震災体験を聴き取ってほしいとの依頼を受けた。聞き取りの一部を報告書の2号（『聞き取りから見える東日本大震災』）にまとめた。以来2016年度に至るまで、引率教員1-2名、院生TA1名（年度を通じて継続）、学部学生5~7名の体制で、毎年4-5回の現地訪問を続けている。現地訪問のほか、平均月1回程度、実習参加学生全員が参加するミーティングを開催し、オリエンテーション、現地を訪ねた学生の報告会（これから訪問する学生については事前学習となる）を行なう。年度末にはシンポジウムを行なって発表し、最後に報告書を編集・刊行している。

学生の参加者（TAを含む）は、2011年度は19名（9月の「お茶っカフェ」オープニング参加学生2名を含む）、2012年度は21名、2013年度は35名、2014年度は25名、2015年度は23名、2016年度は27名であり、合計150名となる。学生たちの中には、実習を契機に、個人的に陸前高田を再訪する者も多数生まれている。

3. 学生の学び

参加学生たちのほとんどは被災地を訪ねるのは初めての経験であり、不安と緊張感をもって陸前高田にやってくる。しかし米崎小学校の仮設住宅をはじめさまざまな場所で、温かく迎えてくれる人々に会い、美味しいものを食べ、陸前高田が好きになる。そして、わたしたちに何ができるのかという大きな問いをもって帰っていく。そうした学生たちの感想のいくつかを紹介しよう。

- ・陸前高田では多くの人と出会いました。最も驚いたことは、陸前高田で出会った人たちはみな強く、優しい人たちであったということです...ボランティアに行ったはずが、私の方が元気や優しさをもって帰ってきてしまった。(2011年度)
- ・英文学を専攻する私は、4年生にして初めて「生きた学び」を、この陸前高田の実習で体験した。私は実際に被災した人の声を聞き、いまだ傷を負った場所を目にした。復興のために立ち上がる人々の熱い思いを聞いた。おばあちゃんたちのおしゃべりを楽しみ、元気な子供たちと遊んだ...自分とは地理的にも、社会関係的にも離れた場所での問題を、自分のものとして考える力を「当事者性、当事者意識」とよぶならば、私はこの授業でそれを持つ力が培われたのではないかと思う...被災地の一つとしての「陸前高田」ではなく、一人一人が生きている場所としての陸前高田だ。(2011年度)
- ・私は今回の実習で、本当にわずかではあるが、被災者の心の奥底にある深い傷を知った。3. 11から時間が止まっている人、心にぽっかり穴が空いている人、身近な人の死を嘆く人、生き残ってしまった自分を責め続ける人、現実を受け入れられない人、自分たちだけが前に進むのが、亡くなった方々に対して申し訳ないと思っている人...被災者の方々が抱える心の傷は、私には想像もできないほど深いに違いない...(2011年度)
- ・市街を車で走る間、あたりを見回すと、平原に草が生えていて、一見のどかなようにさを感じた...しかし市役所、消防署、体育館などの建物を見ていくと...多くの方が犠牲になった場所に立っていることを実感し苦しくなった。建物のありさまは津波の力を雄弁に物語っていて、実習メンバーとも話すことができずに言葉を失った。しかし、その後仮設住宅に向かう道程で山から海を見下ろし、その景色の素晴らしさにはっとした。そしてそれまでの被災地——無残な姿が残っていて復興途上で、つらい思い出が多い中で努力している場所——といったイメージだけでなく、今現在も変化し続けている、自然の美しい土地でもあるということに気づき、自分が先入観を持って陸前高田に来たのではないかと反省した。そして土地だけでなく人々に対してもありのままの姿を見ようと、自分に言い聞かせた。(2012年度)
- ・本当に助けが必要なのは、イベントやコミュニティに顔を出さずエネルギーもなく、ひとり仮設住宅でこもりきってしまった人々なのだろう。弱った部分は概して外からでは見えない。気にかけてあげなければ気が付かない。多少心の整理がついた被災者だけを見て、「被災地の人々は強いから大丈夫」と考えるのはあまりにも危険だ。私には、強さと弱さが平等に、同時に横たわっているように見えた。.....政治を後押しするもの一つは世論だ。私たちが見えぬものに目を凝らし、聞こえぬものに耳を澄ませる、そうした「関心を持ち続けること」がやがて世論となり、政治を動かすかもしれない。被災者の方々の将来は、きっと私たちの「関心の維持」にかかっている。(2013年度)
- ・外部者の持つ可能性について考えた。私たちがこうして、被災地で見聞きしたことや感じたことを持ち帰ることで情報の共有ができるほか、直接的関わりを感じていない周囲の人々に自分自身の場所の体験を与えることができる...実習による実体験は、学生にある種の意識改革をもたらした。今の我々は外部者であるが、部外者ではないという思いである。そもそも、外部/内部という見方は相対的な評価で、分別することはできない、グラデーションのようなものだ。その中で、自分のいる位置も常に揺れ動きながら、今それぞれができることを考えることに意味がある。(2013年度)

4. われわれ（企画者）の学び

わたしはフィールドワークを「調査対象が存在する場所に身を置いて、(文献や統計などでは得られない)一次資料を集める調査方法」と定義している。フィールドワーク実習としての陸前高田実習は、たいへん充実したものだ。その要因の第1は、被災地陸前高田という「場所」のセッティングの特異さである。被災地の風景を自分の目で見、さまざまな場所を歩き、いろいろ美味しいものを食べるという、身体性を通じた場所の体験は、学生にとってインパクトのあるものだった。第2に、拠点とさせてもらった米崎小学校仮設住宅とその集会所、そこでの「お茶っこ」カフェという「場所」の存在である。濃密な交流の空間と、学生たちの訪問の蓄積によって生まれた「お茶大生がまた来てくれた」と迎えてくれる関係性が緊張感のある被災地訪問の中で「ホーム」の役割を果たした。第3に、話を聞かせてくれた住民たちの語り、いずれもたいへんテンションの高いものであり、学生にメッセージを伝えたいという力にあふれていたことである。第4に、参加する学生たちのモチベーションの高さである。2単位の実習の授業で、4泊3日の現地訪問(すべて参加学生の自己負担)のほか、1年間の月1回のミーティング(事前・事後学習)、シンポでの報告、報告書の執筆、と学生には負担の大きいものであったが、毎年応募者が定員を上まわり、途中で脱落する学生は6年間で一人もいなかった。

課題もある。学生にとって、被災地という場所、生死に関わる体験を聞くことの苛酷さから受け取るショック、重さは、通常の実習の域を超えるものだった。また聞き取りの語り(プライバシーに関わる生々しいデータ)をどのように扱うか(プライバシーの保護と語りの文脈の保持の葛藤)という問題も未解決である。

5. 陸前高田の場所と人びとに何を還すのか——わたしたちに何ができるか

実習でお世話になった場所と人びとへのお返しとしてわたしたちがやってきたことは、実習の体験とそれに基づく考察をまとめた報告書を毎年作成し、関係者(仮設住宅住民、訪問先、図書館等)に贈呈することである。このほか学生たちは個々に、自らの体験をSNS等で発信したり、留学先で海外の学生に伝えたりしている。陸前高田のファンになり、繰り返し訪ね続ける学生も相当数いる。

実習の中で私が期待しているのは、「外部者」である学生たちが、陸前高田という場所を体験することで、またそこに生きる人たちと(「被災者」としてではなく、人間として)交感することで、変化し、その思いをもち続け、いくばくか「内部者」になっていくことである。震災によって生まれた困難に関心を寄せ、自らも何か関わりたいと願う。その時点

でその人は、少なくとも「内部者」に近づく入口に立っているといえる。この被災地をめぐる内部者／外部者という問題について私見を述べることで小論を結びたい。

わたしたちは実習で外部者として陸前高田に関わりをもった。そもそも被災地における「内部者」(被災者)／「外部者」とは誰なのだろうか。「被災地」とは、災害を被った地域のことであり、「被災者」とは、災害を被った人のことだ。われわれが訪ねている陸前高田についていえば、被災の状況は地区によって様々だが、親戚や知人・友人の誰かを亡くしていない人などいないから、空間的には直接「被災」していなくとも、皆「被災者」であることには変わりはない。

しかし全員が被災者であるはずの陸前高田の住民の中にも、その意識に微妙な差異がある。わたしたちが何度もお世話になった、りんご農家の金野秀一さんは、震災直後から物資の確保など地域社会のまとめ役として奔走した人だが、自らを「在宅者」(家を流されなかった者)と位置づけ、家族を失った人や、仮設住宅に住む人にくらべればまだ恵まれていると語った。共同体の中に、震災を期に、肉親を失った者や家を失った者、どちらも無事だった者、といった線引きが生まれ、後者は自らを同様に「被災者」として語ることに躊躇している。このように「被災者」＝「内部者」も、けっして均質で一枚岩の存在ではない。

一方、東日本大震災の被災地という空間の外に自らの生活の本拠を持つ人が「外部者」だが、そうした外部者が多数、ボランティアなどとして被災地を訪れ、様々な体験をしたのが、この震災の特徴である。そうした外部者の中には、SETの三井俊介さんのように、陸前高田に住み着いてしまった人もいる。また桜ラインの岡本翔馬さんのように陸前高田出身者で、この震災を契機に陸前高田に戻り、さまざまに活動している人も多い(それは震災を期に他の場所に転出した人に比べればはるかに少数であるにしても)。

しかしそれはもちろん「外部者」が自らの思いだけで、簡単に「内部者」としての理解や協働が可能だということを意味しない。わたしたちは「当事者」ではないからだ。震災を直接体験しておらず、失ったものがない外部者は、直接には震災の当事者ではない。実習の中でわたしたちは震災に関わる体験をたくさん聞いてきた。しかし語られない(聞くことができなかった)話もたくさんあったはずだ。それは遺体安置所で近親者を探した体験であったり、家族を亡くした方の消え去ることのない悔恨や哀惜の情かもしれない。そこには外部者が踏み込めない(踏み込むべきではない)一線がある。

「当事者」は、日本語では事件や問題の当事者というようにもっぱらネガティブな意味合いを持つ語として使われてきた。上野千鶴子は、『ケアの社会学』の中で、当事者をケアという「自己のニーズを充足されるべき権利」を持つ主体として捉えなおそうとしている。そのニーズは、単に第三者によって客観的に規定され、与えられるものではなく、様々なアクターによる相互行為と交渉過程の中で生成される(上野 2011: 65-84)。

震災の問題についての「当事者」を考えようとするとき、どのようなことが言えるだろうか。被災者はけっして「可哀想な人たち」として同情されるべき存在でもなければ、外部の支援に依存する無力な存在でもない。しかし震災によって「理不尽な」被害を受け、様々な物を奪われた被災地／被災者は、やはり上野が言うように「自己のニーズを充足される権利を持つ主体」という意味での「当事者」として捉えられる。

そのニーズは、震災からの様々な意味での「復興」である。その対象となるのは産業、公共施設や商店を含む市街地、住宅といった目に見える、経済的・物質的なものだけではない。そこには、住民の精神的ストレスを含む健康や、コミュニティの社会関係、人々が愛着と帰属意識を持てるような風景や風土といった心理的、社会的なものまでも含まれる。そうしたニーズが単に第三者(たとえば行政)によって客観的に規定され、与えられるものではなく、様々なアクターによる相互行為と交渉過程の中で認識され、生成されるものであるとするならば、その多様なニーズを個人的な違和感や愁訴にとどめずに共有し、その克服や実現を権利として要求していくためにも、そこに外部からかかわるさまざまな主体の存在と、そのかかわり方が重要になってくるのではないか。

わたしが考えるのは「場所」の再構築である。わたしは「場所」を「空間的な近さによって生み出される人と人、人と事物、事物と事物の関係性の束、またそれが実体化した空間」(熊谷 2013:8)と定義している。陸前高田という濃密な場所は、様々な人と土地を基盤にするかかわり(たとえば海産物と農産物を交換するといった社会関係)によって、また気仙川や高田松原をはじめとする風景(熊谷 2011)へのかかわりと愛着などによって、長い時間をかけて紡がれてきた。その喪失感・剥奪感をはかり知れないが、経済的には換算されず、補償もなされえない。被災地で進められる「復興」は、経済的・物質的な側面に偏る傾向がある。これに対しオルタナティブな復興の在り方を構想し、提言していくためにも、被災地の「場所」の喪失(displacement)と被災者の葛藤を、その感情も含めて掬い取る丁寧なフィールドワークと、協働を通じたあらたな場所構築が希求されよう。

外部者はただちに当事者ではないかもしれない。しかし震災の体験は、日本に生きている限り私たち自身がいつ震災の当事者になるかもしれないということを教えてくれる。わたしたちは、そのような意味で単なる外部者や第三者ではありえないところにすでに身を置いている。震災の被害の結果としてだけでなく、当事者と外部者との相互作用と交渉の結果、当事者と当事地域に生まれる「ニーズ」の生成に寄与し、それに対して責任をもちつつかかわり続けていくこと、それが私たち「外部者」の役割なのだと思う。

参考文献

上野千鶴子(2011)『ケアの社会学——当事者主権の福祉社会』太田出版。

熊谷圭知(2011) 風景を失うことの意味——陸前高田と原風景をめぐる。幼児の教育 111(1): 54-58.

熊谷圭知(2013) 場所論再考。お茶の水地理 52: 1-10.

著者紹介

熊谷圭知(くまがい・けいち): お茶の水女子大学文教育学部教授。東京生まれ。父は岩手県陸前高田市、母は盛岡市出身。専門は社会文化地理学・オセアニア地域研究。1979年からパプアニューギニアのフィールドワークに従事。都市移住者の掘立小屋集落や、奥地の村に通い続ける。

住所: 〒156-0043 東京都世田谷区松原 3-23-19-B103, E-mail:kumagai.keichi@ocha.ac.jp

